緑が茂る頃、世間は新年度からの緊張を癒すべく、このゴールデンウィークを活用する。テレビでは少し前からレジャー関係の報道が増え、目玉の観光スポットが多く挙げられる。最近のSNSも、心なしかそういった投稿が目に留まるようになってきた。

アスファルトから少し熱を感じる昨今。クーラーをつけるのを躊躇う程度の暖かさ。小綺麗にした人々が集団で談笑をしながらこの街を歩いていく。無数のオフィスの中など、目もくれなかった。

彼らが作業していたのは、そのうちの一つだった。

「ゴールデンウィークって何してた？」

パソコンを叩きながら刈り上げの彼は言った。声に生気がなく、目の周りにはうっすら窪みがある。

「あー、基本旅行だよね」

マッシュの彼もパソコンを叩きながら答える。彼の声色からして、まともに答える気がないことが分かる。

「そんなアバウトな話は聞いていないんだよ」

刈り上げの彼はエンターキーを大袈裟に叩いた後、手元にあるコーヒーを飲み干した。

「アバウトなほうがいいだろう。お互いのためにも」

マッシュの男も手を止めて、回転椅子を少し机から離し、背もたれにもたれかかる。

オフィスに背もたれの軋む音がやけに響く。彼ら以外は休日だ。

「お話だけでもゴールデンウィークを楽しみたいんだよ」

刈り上げの彼はコーヒーを置いて背伸びをする。口から漏れ出る息遣いも、ここでは効果音に成り上がる。

「それ以上その単語を出さないでくれ。気が滅入る。」

マッシュの男は目線を刈り上げの男に移す。妙にガタイのいい彼は確か大学で体育会系の部活動に入っていたと聞く。成程、こう言う時の馬鹿みたいなメンタルはそこから来る

のか。マッシュに男は呆れたようにため息をついた。

「そっちこそ、そんなため息つかないでくれよ。気が滅入る」

刈り上げの男は少し不機嫌そうに言う。話のノリが悪いのに加えて、気が滅入るようなため息とネガティブな発言。気が重くなるに決まっている。男はヒョロヒョロな彼の方を見て、少し呆れていた。

「そりゃ、ため息の一つや二つつきたくなるだろ」

マッシュの男は若干の苛立ちを感じたが、それに何の生産性もないことを悟る。

対する刈り上げの男も、このトラブルが誰のせいでもなく、ただそれがゴールデンウィークに被さっただけであることを考えると、彼を責める気にはなれなかった。

二人はまた作業へと戻っていく。

「…ただ、俺らにはゴールウィークがなかった」

「そうだな」

言い合いをする気力すらなかった彼らは黙々と作業を続けていく。己の不幸を呪う前に、まずはこの事案を片付けなければならないのだ。

普遍物人 ― 22:48

腹の虫の音。刈り上げ男は作業を中止した。時計は 14 時ごろを指している。

「…どっか食べに行く？」

「いや、やめておくよ」

マッシュの男は間髪入れずに答えた。

「それぐらいいいだろ。別に時間も余裕だし」

刈り上げの男は口をモゴモゴさせながら答える。

「外にはゴールデンウィークを堪能している奴らでいっぱいだ。休憩にならない」

マッシュの男は尚もパソコンを叩き続けている。

「確かに…」

刈り上げの男は納得したように、しかし少し悲しそうに答えた。

「じゃあ、ちょっとコンビニ行ってくるわ…何か買ってくるよ。いるものある？」

マッシュの男は手を止めて画面を見ながら少し考えた。

「20秒チャージと缶コーヒー」

マッシュ男は再びキーボードを叩き始めた。

「はいよ」

彼は静かにその場を去った。

「やっと終わったー」

日が傾き始めた頃、彼らの声に生気が戻る。マッシュの彼は今までにみたこともないほど清々しい笑顔を浮かべていたし、刈り上げの彼は疲労困憊の笑みを浮かべていた。

「なんとかなったな…」

彼はパソコンから目を離し、目を閉じると、眉間を指でハサミ、ぐるぐると回し始めた。二人で喜びの余韻を味わう。なんとも長い作業だったが、これでゴールデンウィーク明けまで何とかなるであろうレベルに仕上がった。

「飲みに行きてー」

マッシュの男がポツリと呟く。その言葉に驚いて、刈り上げの男はギョッと彼の方を向く。マッシュの男は自分の発言に気がつき、パッと口を押さえた。

「あ、いや」

あたふたした彼の様子に刈り上げの男が満面の笑みを浮かべる。いつも誘う側である自分がまさか、しかも彼に誘われることになるとは。

「よっしゃ、いくぞ！」

自分の過ちに気がついた彼は、明日から続くであろう二日酔いを憂いながら、刈り上げの男に釣られていく。しかし彼にとって、ゴールデンウィークなど、もうほとんどないようなものである。それならばいいか。マッシュの男は軽く笑う。

二人は歓楽街へと消えていった。